

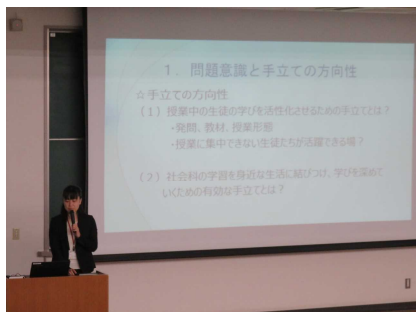
宇大教育実践フォーラム開催される！

平成31年2月9日(土)・10日(日)の二日間にわたって、宇都宮大学峰キャンパスで宇大教育実践フォーラムが開催されました。今年度も二日間開催とし、191名の方々に参加していただきました。県内外の教育や教職大学院での学びについて、幅広く語り合いました。

◆教職大学院教育実践プロジェクト発表会

教職大学院の長期実習科目「教育実践プロジェクト」は、学校現場(連携協力実習校)と連携しながら実践研究を行います。単に院生の関心を解決するだけでなく、学校現場のニーズに寄り添う課題を設定し、二年間かけて解決していきます。子どもたちとの関わりからの学び、授業作りからの学び、校内研修や学校行事と一緒に取り組むことによる学び等々から自身のテーマに迫っていきます。

教育実践プロジェクト発表会は、3会場に分かれ、それぞれの成果が報告されました。活動報告に留まることなく、理論に裏付けられた分析的な成果報告が多数見られました。院生は、実習期間中でも大学で「リフレクション」を行います。実習活動は、院生同士や大学教員が共に振り返り、批判的に検討します。本発表会は、その成果の一部を反映したものと言えるでしょう。



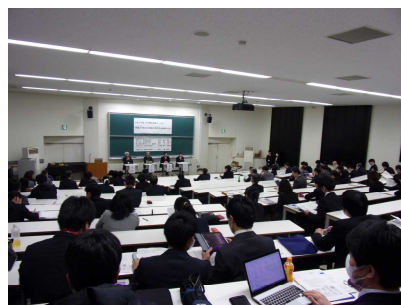
参加者アンケートから以下の感想をいただきました。「年々進化していると感じます。研究に対する大いなる熱意がひしひしと伝わってきました。」「現役の先生方が、いったん立ち止まって学び直す時間の大切さ改めて感じました。」「文字や矢印を詰め込みすぎ・・・(詳細な)資料をよく読んで予習や復習をしたい。」

◆シンポジウム「教職大学院の改革動向と教員育成指標の活用」

シンポジストに、原田唯司先生(静岡大学)、遠藤貴広先生(福井大学)、植木淳先生(栃木県総合教育センター)をお招きし、松本専攻長によるコーディネートによるシンポジウムが開催されました。

前半は、教職大学院の改革動向が報告されました。全国の大学で、修士課程を廃止し教職大学院への一本化が進んでいます。改革の波に乗るだけでなく、教職大学院の本質とは何かを熟考した上で、改革を進めることの必要性を確認しました。後半は、教員育成指標と教職大学院の関連を議論しました。育成指標は、教員

の各ライフステージに合わせた力量が設定されています。教職大学院では、その力を意識した学びを展開することはもちろんですが、それらを下支えする信念(教育観、授業観、学習観など)を醸成する必要性も議論されました。



参加者アンケートから以下の感想をいただきました。「個々の良いところを伸ばすためには、その専門のみにこだわらず、物とのつながり、人とのつながりが大切だと改めて感じました。」「自分自身の疑問も納得できる部分もあり、来年以降の方策も考えることができました。」「教職大学院で学ぶ意義改めて感じることができました。」

◆ラウンドテーブル



2日目は、17のグループに分かれて、ラウンドテーブルが行われました。発表者は、小中学校の先生方、教育委員会の方、大学教員、教職大学院生、内地留学生など様々です。互いの実践を意味づけたり、悩みを共有したりすることで、明日への実践意欲を高め合う機会になりました。

参加者アンケートから以下の感想をいただきました。「同席された先生方の想いを聞き、安心するとともに活力をいただきました。」「自分のやってきたことを振り返ることができてよかった。」「試行錯誤の中から授業を組み立てる面白さを改めて感じた。」

(文責: 久保田善彦)

「WISC-IV心理検査と教育的支援」 教育実践高度化専攻准教授 原田浩司

21世紀に入ってから RTI モデル（子どもの指導結果から早期に指導・介入する）を重視する動きの中で、理論に裏付けされた心理検査の開発が盛んになっています。その代表格が WISC-IV心理検査であり、世界的に活用されています。適用年齢は5歳から16歳。全検査 IQ だけでなく、4つの指標得点の分析から、子どもの様々な認知特性を知ることができます。また、4つの指標得点である「言語理解」「知覚推理」「ワーキングメモリ」「処理速度」と学習活動とは密接な関連があります。「言語理解」には、言語による習得知識、言語による推理力・思考力を問う課題があります。これらは、授業を聞いて考えたり発言・発表したりする学習場面と関係します。「知覚推理」は、課題の図を見て積木を並べ替えたり、多様な図や絵を見ながら目的に応じて推論したりする課題です。図表や資料を読み取る場面や、図形の学習と関係します。「ワーキングメモリ」は数字やかなを覚えたり並べ替えたりする課題です。注意・集中して授業を聞いたり、多くの知識や情報を覚えたりする学習場面と関係します。「処理速度」は、実際に鉛筆を使って一定時間内に記号を書いたり選択したりする課題です。能率よくノートに写す場面や作業能力に関係します。全検査 IQ が同じでも4つの指標得点バランスから子どもの学び方の特徴が読み取れます。さらに、それぞれの指標の基になる下位検査から子どもの認知特性を詳しく見取ることができます。こうした客観的な情報を教育的な支援につなげていくことで、個に応じた指導・支援が効果的になります。最近、カウンセラーがとった WISC-IV心理検査を教育現場でも見る機会が多くなっていますが、心理士の説明を聞くだけで教育的に活用されていない現実もあります。今後は、WISC-IV心理検査など多様なアセスメント結果を心理・教育両面からの適切な見方や解釈ができたり、子どもたちの課題に応じた合理的配慮や教育的支援ができたりする専門性の高い教師養成が求められています。

《シリーズ:院生の声 ⑪》

教育実践フォーラムに参加して

2日間の日程で行われる宇大教育実践フォーラムに参加しました。1日目の教育実践プロジェクト発表会、2日目のラウンドテーブル、ともに、参加された先生方から貴重なご意見、ご質問をいただきました。特に2日目のラウンドテーブルは5~6人ずつのグループで行うため、実践について多くの意見交換を行うことができました。

意見交換では、小学校・中学校・特別支援学校の先生、大学生など、いろいろな立場からご意見をいただきました。その中で特に印象に残っているのは、「 0.6×0.3 はどちらも1より小さい数なので、解は1より小さい数になるのは当たり前なのに・・・」という意見に対して、「それは得意な人の考えで、苦手な立場から言えば計算することだけで精一杯。そんなことまで考えられないです。」という意見でした。「人数を求める問題は整数になるはず。人の歩く速さなのに時速40kmはおかしい。」など、普段の数学の授業で話している当たり前の内容だったので疑問に思うことはなかったのですが、違う立場の先生から指摘されて初めて「私が当たり前」と思っていることは「全員が当たり前とは限らない」ということに気がきました。「当たり前」と思った瞬間に見えなくなるものができてしまう。「当たり前」をもう一度考え直すきっかけをいただいたラウンドテーブルでした。



(2年 小川雅弘)

2年間を振り返って

実践的な知識と指導力を身につければ、2年後には自信をもって教壇に立てるはず！——それが、教職大学院への進学を決めた理由であったと思う。月日がたち修了が目前に迫ったが、果たしてその「自信」はついたのであるか。自信…？ 当時の私は、子どもたちに分かりやすく教える、全員が同じようにできるようにさせる、そのような指導を目指していた。勿論今でも、そのことは一人前の教師として必要であると思っている。しかし、それは最終目標と言えるのだろうか。当初私が想像していた「自信」は、子どもたちに、大人の求める正解を押し付けるだけのものに過ぎない。それでは、教育という名の教師の自己満足のもと、子どものありのままの姿は置き去りにされてゆく。当時の自分を振り返ると、反省の念で胸が痛い。

思い返せば、大学院での講義、院生や教授の先生方との議論、授業研究会や学会への参加など、この2年間の学びの場は多様であり、充実していた。さらに、それと同時に進行で実習等に入り多くの子どもたちと関わったことには、想像以上の意味があった。彼らとの出会いによって、私の「教師対子ども」という概念は大きく揺さぶられた。彼らは「子ども」である以前に、みな一人の人間であるのだと気づかされた。それぞれがみている世界は、実に豊かであった。「大人」であるはずの私も知らなかった感覚や考え——それらを垣間見ることは驚きと発見の連続であり、教職の魅力を改めて実感することになった。彼らのみている世界を映し合い、重ね、互いに広げていくこと——それができる場が学校であり、4月から自分もその一員として関わることが楽しみである。

とは言え、新採の私を待ち受ける現実は、厳しいものだろう。この2年間の学びは、あっけなく崩れ落ちてしまうかもしれない。しかし、そのかけらには必ずや希望の灯がともっていることを信じて、子どもたちや先輩教師とともに歩んでいきたい。

(2年 高橋真実)

《編集・発行》宇都宮大学大学院 教育学研究科 教育実践高度化専攻 (教職大学院)

〒321-8505 栃木県宇都宮市峰町350番地 Tel: 028-649-5242

<http://www.edu.utsunomiya-u.ac.jp/koudoka/index.html>

◇教職大学院Facebook : <https://www.facebook.com/uuptnet> ※院生が編集し、教員が管理しているFacebookです。

